

看護学科FD委員会による平成29年度教員研修会の報告

～「演習」授業の質向上を目指して～

WHAT NURSING COLLEGE STUDENTS ARE LEARNING ? UNDERSTANDING THE EDUCATIONAL CONTENTS AND STRUCTURE OF CURRICULUM FD PROGRAM

—DEPARTMENT OF NURSING—

岡崎 優子 ・ 伊藤 てる子 ・ 武田 美奈子
Yuko OKAZAKI, Teruko ITO, Minako TAKEDA

キーワード：FD、看護、演習

Key words : Faculty Development, Nursing, Nursing practice

要 旨

平成29年度、看護学科ではFDとして「実習に繋がる『演習』授業を目指して」をテーマに、通年3回の研修会を実施した。研修会の目的は、「各看護領域における演習の授業内容の実際を知ることで学生がどのように学んでいるのかを知る」「教員一人一人の授業改善に繋げる」である。方法として各看護学領域の代表者が講義と演習と実習の関連性や演習授業の実際についてプレゼンテーションしたのち、領域を超えたグループに分かれ、意見交換を行った。グループワークで話し合った内容については、研修会内で発表し全体で共有を図った。研修会終了後に研修評価のアンケートを実施し、その結果から、各看護領域で学生が何を学んでいるのかという学習内容を教員は理解できたことがわかった。今後は、教科目全体の構造や学習目標とその達成度を表にして図式化するなど可視化することにより、授業改善に繋げることができないのではないかとと思われる。

I. はじめに

中央教育審議会（文部科学省，2005）によると、ファカルティ・ディベロップメント（Faculty Development 以下 FD とする）とは、教員が授業内容・方法を向上させるための組織的な取り組みの総称とされている。看護学科では、FD 委員会を組織し、学科独自に取り組んできた。ここ数年での活動実績は、授業づくりの実際やシラバス作成方法についての学習会を開催したり、学習評価について意見交換などを行ってきた。

平成29年度の活動として、実習につながる演習授業のあり方を紹介する研修会を企画・実施した。この研修会を企画した意図は、次の通りである。看護教育の内容と方法に関する検討委員会報告書（厚生労働省，2011）によると、「演習は思考を通して知識を統合し、表現する教育方法であり、講義や実習との関連性を考慮し、効果的に位置づけることが必要」とされている。卒業時までには修得すべき看護技術を、本学科では1年次に基本となる看護技術、2年次には看護学領域（以下領域とする）ごとに必要な技術を習得する構成になっている。各領域ではそれぞれの担当教員により演習の授業が行われており、他領域の教員は学生がどのように何を学んでいるのかはシラバスなどを通して知るのが現状である。そのため研修会を開催し、研修会の場で看護技術の演習について、各領域の講義－演習－実習との関連性、演習の授業案の構成、展開、教授方法を発表し、相互評価を行うことが授業の質向上に繋がると考えた。

この研修会の企画・実施・評価について報告する。

なお、本学科における「看護学領域」とは、基礎看護学領域、成人看護学領域、老年看護学領域、精神看護学領域、母性看護学領域、小児看護学領域、在宅看護論領域を示している。

II. 方法

1. 研修目的

研修会の目的を以下の2つにした。

1) 各領域の「演習」の授業内容の実際を知ること、領域での学習内容や学生が何をどのように学んでいるのかを理解する

2) プレゼンテーション・グループワークを通して発表者・参加者相互の授業改善に繋げる

2. テーマ

研修会のテーマを「実習に繋がる『演習』授業を目指して」とした。

3. 倫理的配慮

学科会議で研修会の企画について、書面をもって説明し、研修終了後に実践報告を紀要へ投稿予定であることを周知した。アンケート用紙は無記名での回答とし、個人が特定されないように配慮した。さらにアンケート用紙にプライバシーを保護することを明記し、アンケート用紙への回答を以って、調査協力への同意とみなした。また、研修会の際の演習授業についての発表者には論文内容を確認してもらい、公表への許可を得た。

4. 研修会の企画

1) プログラム

(1) 全ての領域が発表できるよう3回（1回目2領域、2回目3領域、3回目2領域）実施する。

(2) 1回の内容は下記の通り

①領域による演習授業についてのプレゼンテーション（1領域15分程度）

- ・演習の授業の位置づけ（講義－演習－実習の関連性からどのように考えているか）
- ・学生のレディネスを踏まえた演習の授業の工夫
- ・「技術」をどのように教えているか

②グループワーク（40分程度）

- ・グループ編成は、領域を超えて意見交換できるよう、事前にFD委員が編成する
- ・4つのテーマ「発表から参考になること」「学生のレディネスについて」「より効果的な演習をするために」「その他」を提示し、グループ内で話し合う
- ・各グループから話し合いの内容を発表する

- ・グループ内での意見交換の内容は、グループの書記が記載しグループワーク終了時にFD委員に提出する

2) 対象者は看護学科教員23名と演習や実習に係る非常勤講師

3) アンケート内容

- (1) 無記名で自記式の様式とし、以下の質問内容①～③については「よくわかった」「だいたいわかった」「あまりわからなかった」「よくわからなかった」の4段階評価にした。質問内容④、⑤については自由記載とした。

【質問内容】

- ①発表領域の「演習の目的」「演習内容」「カリキュラム上の位置づけ」が理解できたか
- ②領域の発表時間は適切か
- ③グループ内での意見交換ができたか
- ④研修会に参加したことで今後演習や授業で参考にしたいこと
- ⑤今後の研修会への要望

Ⅲ. 結果

1. 発表領域と参加人数及び発表内容の概要と意見

1) 開催回、実施月、担当領域、参加人数は表

1の通りである。聴講は非常勤講師であった。

表1 研修会の実施と参加人数

開催回と実施月	担当領域	参加人数(人)
1回目(8月)	成人	16
	小児	
2回目(9月)	基礎	19 (うち聴講1)
	母性	
	精神	
3回目(11月)	老年	19
	在宅	

業務の調整がつかなかったもの、体調不良などを除いてほぼ全員参加した。

- 2) 発表内容の概要とグループワークでの意見領域においての授業の構成、到達目標、演習の到達度、実習前に習得させたい内容など、その領域の特性を踏まえたプレゼンテーションがなされた。グループワークの意見交換は、4つのテーマを提示したが、テーマにとらわれず自由に語られ、意見交換の内容は記録され終了時に提出された(表2)。グループワークでの意見は、「授業と演習と実習の流れの全体が可視化され、わかりやすかった」「学生数に対して、演習を担当する教員数が少ないという実情があるが、シュミレーターの活

表2 発表内容の概要とグループワークでの意見

回	領域	発表内容の概要	グループワークでの意見
1	成人	<ul style="list-style-type: none"> ・成人看護学概論、成人看護学援助論Ⅰ、成人看護学実習Ⅰ、成人看護学援助論Ⅱ、成人看護学実習Ⅱの順番と到達目標および演習の目標と内容について提示 ・各領域実習と成人看護学実習との関係性を図示 ・成人看護学実習ⅠおよびⅡの時点での学生のレディネスと実習の際の演習の工夫と概要について紹介 ・演習で行う技術と卒業時到達度表との関連性 ・看護過程の展開に使用する事例の紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表資料より、授業と演習と実習の流れの全体が可視化され、わかりやすい ・成人Ⅰ実習ではほとんどが老年期の患者を受け持つ現状がある ・各領域でのつながりを教員が同じ視点で理解でき合意していければよい ・学生は領域や場面が変わると違ったものととらえてしまう ・基礎では技術の原理原則を学び、成人では患者の状態に応じて技術を学んでいることがわかった ・学生にも可視化できる各領域の技術マップがあるとよい
	小児	<ul style="list-style-type: none"> ・小児看護学における3つの学習目標と小児看護学概論、小児看護学援助論Ⅰ・Ⅱ、小児看護学実習との関係 ・小児看護学援助論Ⅱにおける演習時間とその内容、実習と演習の関係 ・身体計測を例に、演習授業と資料の紹介、学生のレディネス 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習目標について、実習と援助論とでつながっている必要がある ・病児だけでなく健康児の理解も必要ではないか ・実習前の学内演習で新たな技術習得になっていないか

2	基礎	<ul style="list-style-type: none"> 1年次の前期の講義（看護倫理、看護学原論）と技術（基礎看護学技術Ⅰ・Ⅱ）と基礎看護学実習Ⅰならびに後期の講義（看護学総論、看護過程論）と技術（基礎看護学技術Ⅲ・Ⅳ）と基礎看護学実習Ⅱとの関連性の紹介 基礎看護学技術Ⅰ・Ⅱにおける演習内容と基礎看護学実習の経験内容、基礎看護学技術Ⅲ・Ⅳにおける演習内容と基礎看護学実習の経験内容 1年次における看護技術の到達度を示したマップの紹介 演習「活動と休息援助技術」授業概要の紹介 	<ul style="list-style-type: none"> 今回の資料が大変見やすく、授業計画や目標の明文化、実習に至るまでの演習の構成等がよくわかる 1年次のレディネスに合わせた授業・演習計画と思われる 演習と実習を繋ぐために、実習でよく受け持つ事例や場面など状況設定をし、判断する力を基本的な技術の段階から養っていくとよいのではないか 学科全体で何をどこまで教えるかを領域間で摺合せを行い、そこに到達できるよう演習を行うとよいのではないか
	母性	<ul style="list-style-type: none"> 母性看護学概論・母性看護学援助論Ⅰ、母性看護学援助論Ⅱと演習、母性看護学実習との関連性のおよび到達目標と演習内容の紹介 演習の実施要項と演習の課題の紹介 演習時の工夫として、対象となる妊産褥婦・新生児のイメージがしやすいようにストーリー性をもった場面展開を行う。演習前・演習後のレポートにより自己の課題を明確化できるようにしている 技術を確実なものとするためグループワークや事前学習でのDVD学習を取り入れている 実習前の演習では学生一人一人の知識や技術のチェックを行う 	<ul style="list-style-type: none"> 患者に看護の対象となる人のイメージを持たせるのが難しそう 学生数に対して担当教員2名なので、マンパワーが必要なのではないか マンパワーの限界があるので、2～3年次はクリティカルシンキングを用いた演習の工夫やシュミレーターを充実させることも必要 実習での経験にはばらつきが生じてしまうので学内実習の位置づけは重要と思われる 周産期だけではなく婦人科外来、病棟での看護も必要に思えるので、実習の在り方なども今後検討が必要ではないか
	精神	<ul style="list-style-type: none"> 精神看護学における自己理解・他者理解 看護場面のロールプレイング イラストを用いた事例の資料の紹介 ケーススタディの紹介 	<ul style="list-style-type: none"> 学生は精神疾患を持つ患者の実習に対し、「怖い」というイメージがある イラストの事例は学生にとってわかりやすい 社会復帰した患者との関わりも有効なのではないか
3	老年	<ul style="list-style-type: none"> 老年看護学概論、老年看護学援助論Ⅰ・老年看護学援助論Ⅱ、老年看護学実習の目標と、学習内容の紹介 演習は老年看護学援助論Ⅱで実施しており、技術練習やシュミレーションを取り入れている 学生のレディネスとして、学生が持つ「高齢者」「老い」に対するイメージの紹介 授業や演習での体験を通して高齢者を理解するための工夫について紹介（グループワークの進め方、作成した資料） 	<ul style="list-style-type: none"> 学生のレディネスとして生活体験が乏しいことがあるが、体験できるように工夫されている オムツの装着などを通して、体感することも大切だ イメージができない学生にシュミレーションを通して経験させることは大切だが、限られた時間で行うことは難しいと考える。そのため学生が考えることに重点を置くことも必要 授業は「高齢者」や「老い」がイメージできるように工夫されている（授業で用いられるイラストや図などがわかりやすい） 演習の最後に学んだことの発表を学生にさせて教えたポイントが理解できているか、ズレがないかの確認作業を行うとよい 演習の際には、事例を用いると学生が自ら考えるようになるので、効果がある 学生の人数に対して、教員のマンパワーの不足を感じる時がある。共通した学習内容のときには、領域を超えて演習を行うとよいのではないか
	在宅	<ul style="list-style-type: none"> 在宅看護論の概要と目標についての紹介 他領域と在宅看護援助論で学習する援助技術のマップを提示 今後の課題として、新国家試験出題基準により、出題数が多くなったことにより、これらを授業評価テストに含めていくこと、特に老年看護領域との連携・協働を図る必要性がある 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎や成人の技術をベースにした、在宅領域での技術マップがわかりやすい 発表を聞いて老年と在宅領域のつながりがわかった 他領域と重複する授業内容ではなく、領域の特徴を強調できるとよいのではないか 他領域の授業進度を見ながら在宅領域の授業の順序を調整したり、小児領域などと連携をとってもよいのではないか

用やクリティカルシンキングを用いた工夫をしていることがわかった」「領域間の（演習の）つながりがわかった」という意見があった。

3) アンケート結果

(1) 各回のアンケート回収数と回収率

各回の回収数や回収率は表3の通りである。

表3 アンケート配布数・回収数と回収率

	配布数	回収数	回収率(%)
第1回	16	14	87.5
第2回	19	14	77.7
第3回	19	17	89.4

(2) 質問項目に対する回答 (図1～3)

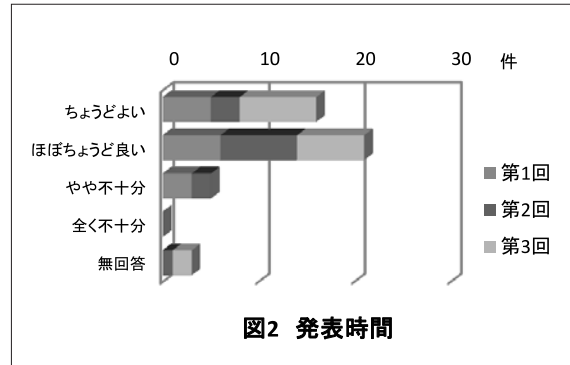
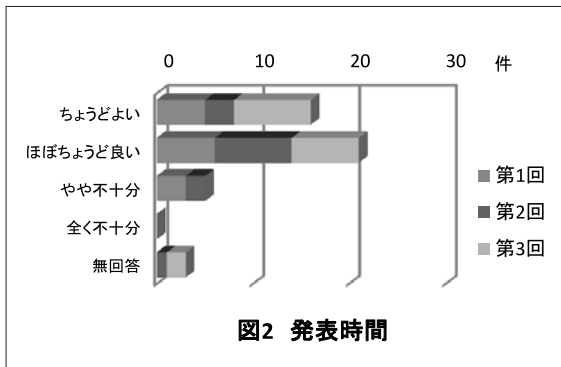


図2 発表時間

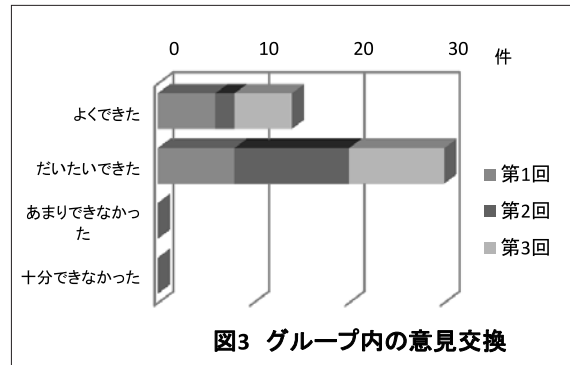


図3 グループ内の意見交換

(3) 今後の演習や授業で参考にしたいこと (自由記載)

各回のアンケートでの自由記載内容について、文脈ごとに整理し類似した意味を持つ記録単位を分類した。これらをサブカテゴリー化して意味をあらわす標題をつけた。さらに

表4 「今後の演習や授業で参考にしたいこと」自由記載の内容

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的な内容の記録単位
学科全体の共通認識や関連する領域間の連携	学科全体で看護をどう教えるか共通認識を持つことが効果的だ	<ul style="list-style-type: none"> 2年次の体験（成人Iなど）を後期の授業で活かしていきたいと感じた。学科全体で看護をどう教えるのかという発表が印象的だった 全体で共通認識を持つこと、現在自領域で行っていることが効果的であることを再認識できた
	領域間の関連性が理解できた	<ul style="list-style-type: none"> 自分が担当している講義内容が複数の領域にわたることについて認識できた。他領域ではどのように取り上げられているのか情報共有して授業計画を立てたいと思った。他領域の演習にも参加したいと思った 発表担当の領域から、技術を教授するためのステップが明確に示され、また具体的な教授方法の発表があったので参考にできる。技術を体験する前の準備の重要性や場面設定の具体化も参考になった。特に在宅はすべての領域と関連しており、自分の領域とのつながりを確認できた
	関連した領域間での連携や合意が図れるとよい	<ul style="list-style-type: none"> 領域間の連携の大切さを改めて感じた 各領域で講義・演習の位置づけがわかるマップのようなものが作成されると相互理解に繋がると思う。科目のつながりの表は参考になった 各領域の講義・演習の具体的な部分について学習のレベルにつながりを持たせ、それを紙面にまとめていく作業ができると、教員間の合意につなげていけるのではないかなと思った 各領域の教員とコミュニケーションをとりながら授業を作成していきたい 他領域とのコミュニケーションのとれる貴重な機会なので、連携につなげることができればと思う 関連する領域の科目・項目をそれぞれがどのように計画するか検討し、連携が図れるとよい

<p>講義－演習－ 実習の繋が り</p>	<p>講義－演習－実 習の繋がりが理 解できた</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・講義や演習での内容がどのように実習とつながっているのか意識する必要があると実感した ・各領域での演習から実習のつながりが分かってよかった ・各領域の講義と演習、実習とのつながりの実態が分かった。今後の課題や検討事項等、プレゼンの内容のサマリーがあると理解しやすい ・実習と演習、講義をつなげて考えることの大切さを知った。老年の授業の資料などとても見やすく参考にしたい。ケーススタディとつなげて考えることも大切だと思った ・看護学生の実習・演習が理解できた
<p>理解を深め る可視化</p>	<p>講義や演習の位 置づけを構造化 しマップとして 可視化するとよ い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・講義と演習の位置づけや関連性を明確にすると何を学ばせるべきなのか、何を学ばせたいのかがわかりやすくなる。カリキュラム全体の構造化の必要性がわかった。表にしたことで不足している演習などがわかりやすくなったので、演習を考える際の目安にしたい ・成人の資料がとてもわかりやすかったので、全領域で参考にしてはどうか ・成人の資料で、1年次からのカリキュラムの流れがひとまとめになっていてとてもわかりやすかった。他領域のシラバスや実習要項は見るが、しっかりとした演習内容や到達目標をまとめてあることを今後の参考にしたい ・講義から実習という全体のマップは理解を深める ・各領域の授業計画が可視化され、強化すべきところはどこか、改善点がどこか検討されるとよい
	<p>教員・学生間で 共通理解のため の可視化された 資料があるとよ い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業科目の講義と演習内容と一覧化した資料は、教員・学生間で共通のツールとして活用していきたい
<p>学生がイメ ージしやすい、 わかりやす い授業の工 夫</p>	<p>学習到達度の明 示やチェックリ ストを活用する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業時の技術到達度を意識した演習をされていると感じた。参考にしたい。また、具体的な演習の内容を提示されていてわかりやすくてとてもよいと思った。参考にしたい ・基礎看護技術で作成しているチェックリストを活用することで、事例の設定をシンプルなものから順に変化させていき、判断を求める内容に発展させることができるのではないかと ・各領域での到達レベルを共有し、基礎領域からのプロセスに乗せていくことができるとうよいと思った。基礎領域での演習内容到達目標を自領域で活かしていきたい ・学生と演習の段階から、到達度を確認しながら、学習をすすめていく ・各領域での授業時間内での到達可能な技術の明確化
	<p>授業展開するう えでは学生のレ ディネス把握を する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業案作成時にレディネスをもう少し丁寧に確認したいと思った ・他領域の演習について、改めて知ることができたので3年次の学生のレディネス把握につなげていきたい ・イメージ化や学生のレディネスを踏まえた授業展開の工夫が参考になった
	<p>学生がイメ ージを膨らませ、思 考できる状況設 定や体験学習な どを取り入れる ことで学生の理 解を深めたい</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・社会情勢に合わせた演習内容の再考 ・資料の作り方から活用方法、身近なものから想像しやすくななどが多くあった ・老年の演習資料や在宅の国試対策が参考になった ・学生のキャパシティを考慮した学習内容と学生の気づきを引き出す「しかけ」が必要である ・母性領域の課題の様式が学生にわかりやすくまとまっていると思った ・状況設定を加え、学生がイメージできるように工夫していきたい ・学生がリアルに学べる体験学習を取り入れたい。学習順序や体系的に考えられる表を作る ・学生に考えさせることができるようにか想像できる状況を設定するののかについて考えていきたい（DVDや画像の活用） ・具体的に生活をイメージできるような授業演習等の組み立てに役立てることができそう ・学生がイメージをしやすいような具体的な方法を知る機会になったので、意識していきたい ・授業のすすめ方で学生により理解してもらうための工夫がされていると感じた視覚に訴えて、そこから考えさせることなど、より具体的でよかった。これからも教員側の授業の工夫、指導の工夫等も大事だと思う
<p>実習の際の参考 にしたい</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・基礎領域の演習の構成の段階がよく理解でき、実際の演習のながれを把握することができた。基礎実習、成人実習の臨地実習の参考にしたい ・今後の実習に参考になる

サブカテゴリーの類似の意味をまとめ、カテゴリー化した。分類は複数の FD 委員で行った（表 4）。

アンケートの回答率は77.7～89.4%であった（表 3）。3回にわたる研修会のアンケート回収率に10%の差があるが、評価の傾向に大きな違いはなかった（図 1～3）。質問項目 1「各領域の発表内容の理解」の質問に対しては「よくわかった」「だいたいわかった」が大部分を占めた（図 1）。

表 4 の自由記載では、各領域における講義－演習－実習という学習内容のあり方が理解できたという意見があった。さらに、講義や演習の時期や内容を一覧できるように表に表す（資料 1 参照）など構造化し可視化することが、教員にとっては、改善点や強化すべき点が検討されやすく、学生にとっては学習の目標がわかりやすいのではないかという意見があった。また学科全体での共通認識や領域間での連携が重要であることも述べられていた。学生の学習レディネスを丁寧に把握したいという意見や、学生がイメージしやすいような教授法、学生の気づきや思考を促進する「しかけ」になる状況設定や資料の作成などが参考になったという意見が多かった。

IV. 考察

1. 本研修会の目的の達成度について

1) 「各領域における演習の授業内容や学生が何をどのように学んでいるかを理解する」について

事後アンケート「（各領域の）発表内容の理解」の結果において、「よくわかった」「わかった」という回答が大部分を占めていた（図 1）。このことから、参加した教員間での具体的な教育内容の理解が得られたと考える。これまでは各領域で演習がどのような目的を持ち、どのような構成をされているのかシラバスで概要は理解できても、一単元の講義・演習内容の位置づけや具体的な授業構成、ど

のような意図のもと資料を作成して使用しているのかまでは把握できなかった。今回の研修会で各領域から発表されたことにより、一部ではあるが、演習の授業の到達目標や内容、教材の工夫、学生のレディネスについて、参加者全員で共有できたと評価する。このことは、同じ視点で学生の教育に携われることにもつながり、この研修会を実施した意義があったと思われる。また、アンケートの自由記載から、学科全体で共通認識を持ち、関連する領域間で連携するとよいのではという記述があり、本学科の教員が講義や演習でも連携し組織的に学習にかかわっていくという意識が持てたのではないかと考えられる。

2) 「発表者・参加者相互の授業改善に繋げる」について

先行研究では、母性看護学の学習において、学生は「覚えることが多い」「自分の体験では追い付かない」という理由から、学習が難しいと感じていると言われている（山口，2013；谷野，木下，2014）。老年看護学では、学生が持つ「古い」に対するイメージは肯定的である一方で否定的であったりときまざりである（井村，森山，2013；三輪，金原，2015）。精神疾患を持つ患者に対する学生のイメージは、社会的なスティグマから負のイメージを持つことがあるとの報告がある（澤田，中山，2015）。このような特性を持つ学生にとって、演習の授業では患者のイメージが湧きやすいような、イラストや図などを用いたり、シュミレーション体験を通して、患者理解に繋げるなどの工夫が紹介された。アンケート結果からもこの工夫は授業展開の参考にもなっている。

また、発表用資料として自領域での教科目全体を構造化した表を作成したもの（資料 1）を紹介したことにより、講義－演習－実習の関連性、各到達目標、技術到達目標が明らかになり、ひいては各領域の学習内容との関連性がわかりやすいという意見もあった。「こ

の表を用いることで、改善点や強化すべき点を検討し、改善に繋がる」とアンケートの意見でもあったので、今回、表を作成していなかった領域については、自領域での評価のためにも可視化し評価していく必要があると考える。この表は、学生にとっても、いつ、何を学ぶのか、その教科目が終了したときに自分はどのような知識や技術を習得できるのかイメージしやすく、何を目指して学習するのか理解しやすいため、学生用に提示してもよいのではという意見もあった。これに対しての取り組みは今後の課題と考える。

2. FDの今後の展望

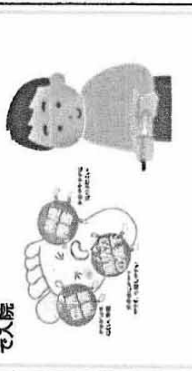

看護教育の内容と方法に関する検討会（厚生労働省、2011）では、教育の質向上のためには教員個人の自己評価ばかりでなく、組織的・定期的に全体的な教育の内容及び方法についての評価が必要と述べられている。本学では、学生による授業評価を年2回設けている。学生による評価、教員相互による評価、また協力が得られるのであれば、臨床指導者などからの評価も今後は必要になるかもしれない。多角的な視点から評価し、授業の質向上を目指していく必要がある。

V. 結論

看護学科FD委員会では平成29年度の研修会を「実習に繋がる『演習』授業を目指して」として3回に分けて実施した。ほとんどの教員が参加し、目的としていた、各領域の「演習」の授業内容の実際を知ることで、領域での学習内容や学生が何をどのように学んでいるのかを理解することができた。プレゼンテーションやグループワークを通して発表者・参加者相互の授業改善に繋げることについては、教科目全体を構造化し、達成度を評価するため可視化する必要性があると思われた。さらに、この可視化は学生にとっても、学ぶ内容や時期が明確となるため、有意義であると思われ、取り組みに関しては今後の検討課題と考えられる。

文献

- 文部科学省：中央教育審議会、用語解説（2005）
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212912_002.pdf（2018, 3アクセス）
- 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書, (2011)
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf,12>. (2018, 4アクセス)
- 山口静江（2013）：母性看護学に対する苦手意識の形成要因と軽減要因, 第43回日本看護学会論文集, 母性看護, 84～87.
- 谷野宏美, 木下てる子（2014）：学生が持つ母性看護に対するイメージの変化—母性看護学の講義と実習を通して—, 新見公立大学紀要, 第35巻, 61～65.
- 井村佳子, 森山悦子（2013）：看護学生が講義終了時にとらえた老いの受け止め方に関する検討, 第43回日本看護学会論文集, 老年看護, 134～137.
- 三輪のり子, 金原京子（2015）：ゆとり世代の看護学生における高齢者観の特徴～「普段見たり聞いたりする像」「将来なりたい像」「将来なりたくない像」「自分にとっての存在」の視点から読み解く～, 老年看護学, 第19巻第2号, 47～57.
- 澤田由美, 中山亜弓（2014）：看護学部制の精神疾患患者への認識—患者とである体験から学生がとらえた患者像—新見公立大学, 第44回日本看護学会論文集, 看護教育, 50～53.
- 再掲：厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書, <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf>, 14. (2018. 4アクセス)

1 年次(後期)	2 年次(前期)	2 年次(後期)	3 年次(集中)																																
<p>成人看護学概論 2 単位(15 回)・演習 成人看護学実習Ⅰ 履修要件</p> <p>【到達目標】 1. 成人期にある人の身体的・心理的・社会的特徴とその発達課題が理解できる。 2. 成人期にある人を取り巻く社会と健康に関する動向、健康問題の特徴が理解できる。 3. 成人期にある人の健康状態や健康問題に対処した看護の基本的な考え方や方法が理解できる。</p> <p>成人期の特徴・発達課題 健康問題の特徴・看護</p>	<p>成人看護学概論 2 単位(30 回)・演習</p> <p>【到達目標】 1. 慢性疾患患者・家族に対してセルフケアを促し、慢性疾患との共存を支える援助、リハビリテーション看護、人生の最後の時を支える看護について理解できる。 2. がんの特殊性を多角的に捉え、患者・家族のQOL を高め、患者と家族が主体的に生きるための看護実践について理解できる。 3. 系統別健康問題のある成人患者・家族の身体的・心理・社会的特徴を捉え、問題解決の系統的アプローチと看護理論、看護技術を適用し、成長・発達・適応へ向けての看護方法を修得することができる。</p> <p>慢性疾患の特徴・予防・緩和ケア がんの特徴・緩和ケア 終末期の看護</p>	<p>成人看護学概論Ⅱ 2 単位(30 回)演習</p> <p>【到達目標】 1. 健康状態が急激に変化した生命の危険状況にある人の身体的状況とその回復過程の特徴が理解できる。 2. 急性期および回復期における看護の役割が理解できる。 3. 慢性期および回復期にある患者・家族に対して具体的な看護の方法が説明できる。 4. 手術を受ける患者の看護過程を説明できる。 5. 急性期および回復期看護に必要な看護技術について理解し正確に実践できる。</p> <p>急性期・回復期</p>	<p>成人看護学実習Ⅱ 3 単位 120 時間</p> <p>【実習目的】健康問題や治療によりストレス・危機状況にある成人患者・家族に対し、成人看護学での実習学習内容を統合した看護実践能力を養う</p> <p>【受け持たせたい患者】 急性期・回復期にある患者 ・外科的治療(手術前・中・後)を受ける患者 ・身体的特徴が大きい検査や治療を受ける患者 ・慢性疾患の急性増悪の患者 ・循環・呼吸状態が変化しやすい患者</p> <p>【実習目標】 1. 成人期にある対象の看護過程が展開できる 2. 看護過程に基づいた看護実践ができる 3. 医療チームの一員としての役割を理解し行動できる 4. 看護職を目指す学生としての責任を認識した行動ができる</p> <p>【学内実習】 I. 目的にこれまでに学んだ知識・技術を復習し、成人看護学実習Ⅱの臨地実習に備えることができる II. 【方法】 1. 成人看護学実習を専任講師と、小テストで確認 2. 急性期・回復期の看護過程展開技術を復習 3. 「先輩の経験を学ぼう」：成人看護学実習において、学生が実習中に体験しているインシデントを学習し、安全な実習のための自己課題を確認 【目標・方法】 【目標・方法】 1. 周手術期にある患者、便量の多い検査・治療を受ける患者をイメージすることができる。 2. 手術や検査、治療に伴い起こる合併症のリスクを評価できる 3. 術後合併症を予防する看護について、理解することができる 4. 実習指導者となる疾患・検査・治療について知識を整理することができる 5. 急性期実習で特に実践する機会が多い看護技術について、手技を確認し正しく実施できる</p> <p>【課題】 ①麻酔を受ける患者の看護(麻酔の基礎知識、手術・麻酔記録の読み方、手術・検査治療記録の書き方) ②人工呼吸器による呼吸管理の実践(呼吸管理の概要、気管内挿管・気管後の影響 【演習】受け持ち患者(病棟・治療)を想定</p> <table border="1" data-bbox="1141 168 1396 638"> <tr><th>技術No</th><td>17,56,70~72</td></tr> <tr><th></th><td>75,80,95</td></tr> <tr><th></th><td>132,133</td></tr> <tr><th></th><td>124~127</td></tr> <tr><th></th><td>69</td></tr> <tr><th></th><td>50</td></tr> <tr><th></th><td>131~133</td></tr> <tr><th></th><td>135,137</td></tr> </table>	技術No	17,56,70~72		75,80,95		132,133		124~127		69		50		131~133		135,137																
技術No	17,56,70~72																																		
	75,80,95																																		
	132,133																																		
	124~127																																		
	69																																		
	50																																		
	131~133																																		
	135,137																																		
<p>【実習】生体検査、慢性疾患を有する患者のセルフマネジメントを促す看護技術</p> <table border="1" data-bbox="646 1456 869 1825"> <tr><th>技術No</th><td>117~120</td></tr> <tr><th></th><td>116</td></tr> <tr><th></th><td>97・98</td></tr> <tr><th></th><td>セルフマネジメント支援(指導・面接技術)</td></tr> <tr><th></th><td>5・7・8・9</td></tr> <tr><th></th><td>看護過程の展開</td></tr> </table> <p>【看護過程事例】 60歳男性 糖尿病性腎症(腎症第4期) 糖尿病合併症精査およびインスリン導入目的で入院</p> 	技術No	117~120		116		97・98		セルフマネジメント支援(指導・面接技術)		5・7・8・9		看護過程の展開	<p>【学内実習】 【目的】これまでに学んだ知識・技術を復習し、成人看護学実習Ⅰの臨地実習に備えることができる 【目標・方法】 1. 「先輩の経験を学ぼう」：成人看護学実習において、学生が実習中に体験しているインシデントを学習し、安全な実習のための自己課題を確認 2. 慢性期・回復期の看護過程展開技術を復習 3. 慢性期・回復期実習で実践する機会が多い看護技術について、手技を確認し正しく実施できる</p> <p>【演習】 1 輸液ラインのある患者の導管交換 54 2 個人防護具の取り扱い 124~127 3 フォジカルアクセスメント 110~114 4 基本的看護技術の練習 5 インタレントカンファレンス 131~133 【実習目的】目標や実習記録の特徴をふまえて、実習で振り返りやすいインシデントと予防策を考えよう!</p>	<p>【実習】緊急時・周手術期の看護技術</p> <table border="1" data-bbox="630 638 869 1041"> <tr><th>技術No</th><td>102~109</td></tr> <tr><th></th><td>17,56,70~72</td></tr> <tr><th></th><td>75,80,95</td></tr> <tr><th></th><td>50,54</td></tr> <tr><th></th><td>56,60,63,66</td></tr> </table> <p>【設定事例】 52歳女性、主婦 診断名：胃がん 術式：幽門側胃切除術 全身麻酔による開腹手術・手術直後、術後1日目</p> 	技術No	102~109		17,56,70~72		75,80,95		50,54		56,60,63,66	<p>【実習】緊急時・周手術期の看護技術</p> <table border="1" data-bbox="630 638 869 1041"> <tr><th>技術No</th><td>102~109</td></tr> <tr><th></th><td>17,56,70~72</td></tr> <tr><th></th><td>75,80,95</td></tr> <tr><th></th><td>50,54</td></tr> <tr><th></th><td>56,60,63,66</td></tr> </table> <p>【実習】受け持ち患者(病棟・治療)を想定</p>	技術No	102~109		17,56,70~72		75,80,95		50,54		56,60,63,66
技術No	117~120																																		
	116																																		
	97・98																																		
	セルフマネジメント支援(指導・面接技術)																																		
	5・7・8・9																																		
	看護過程の展開																																		
技術No	102~109																																		
	17,56,70~72																																		
	75,80,95																																		
	50,54																																		
	56,60,63,66																																		
技術No	102~109																																		
	17,56,70~72																																		
	75,80,95																																		
	50,54																																		
	56,60,63,66																																		

資料1 成人領域 科目一覧